木漏れ日

杉山智哉

妻の淹れた珈琲を夫が嗜んでいる
路傍に落ちる雨の音が
まだ終わってほしくないと
干渉のない緩やかな時間の流れは
床に運ぶ温度になっている
商店街の茜色　散歩道の曙色
石を蹴って　川を覗いた
どこにでも落ちているような
温度に包み込まれる
二人の邪魔をしまいと
庭の金魚鉢に蛙が飛び込んだ
古書の香りと茶の香りに音がして
懐かしむ間隙が落ちていき
底のない記憶の中で
鳩の鳴く縁側の風鈴を揺らす
畳の匂いの奥にある
扇風機の音に目を瞑り
百日紅の花を思い浮かべて
深い香りの珈琲を一口啜った
麦わら帽子から薄茶色の髪が靡く
目線の先で猫が何かを追いかけていた
夏影に隠れながら
目に入るものを言葉にする声が
肌を撫でる感覚を残して

不規則なリズムの足音の隙間に
柔らかな抑揚を見つけた
細く小さな手に引かれ
池を覗く横顔に
来年もまた触れていたいと
遊歩道を並んで歩いた
雨の落ちる音がする
庭の蛙が
角砂糖の入ったガラス瓶を睨んでいた
蓋を持ち上げる重たさが
もう何年も前の
珈琲の香りを連れてきて
溶けた甘さを溢さぬよう
麦わら帽子の記憶で掬った
赤く溶けた唇の柔らかさが
思い出を巡らせ
淡く濡れた肌を噛み
花が散る瞬間の小さな音が
深い温度になり命を産んだ
それはごく自然の流れであって
それがあるから
今の私があるのだと
まだ誰も知らないだろうけれど
扇風機に当たりながら
線香の香りを横に置き
庭の百日紅が花を咲かせている